



愛育園の仕事について九年目になりました。

愛育園の、日課に沿った毎日を過ごして

っていると、子どもたちの生活が蘇ってきます。愛育園が私そのものといった感覚を覚えます。そして、愛育園で育った子どもたちのことがいろいろと心に浮かんできます。

愛育園は集団生活ですから、集団の中でどうやって生き延びるかが、子どもにとつては重要な課題です。子どもたちの集団は力関係です。力の強い者が羽振りをきかせる。弱い者は、その羽の下にかくまってもらうか、小さくなって生きていく。年齢差がありますから、中学生と小学生、幼児では歴然とした力の差です。

裏

表

思い返してみますと、私が父母の子であることはみんな知っていましたから、それなりに恵まれた立ち位置にいました。でも、私はできるだけ目立たないようにはしていました。目立つと、いろいろと言われる。中傷される。それが嫌だったからです。おっしやんの子と言われるのも嫌だった。小学校の高学年あたりから勉強はよくできるようになったのですが、できないふりを

していました。中学三年ころになると家庭学習をしていたのですが、してないふりをしていました。集団の役員になるなどと表に出ることは極力避けていました。「デーブーデーブー百貫デーブー電車にひかれて死んじまえ」とか「泣き虫」とか「あたま」とか、悪口を言われても気にしないように、にこにこしています。

ニコニコ法話

た。周りには合わせて馬鹿なことを言つて笑わせていました。それが生き延びる術すべだったのです。

愛育園は朝夕のおまいりがあります。六十八年間一日も欠かさず続けています。朝のおまいりの後に、父のお話がありました。長い長いお話でした。お腹がすくし、足は痛いしで、早く終わらないかなあといつも思っていました。

そのお話の内容は、きつと良いことがたくさん詰まっていたのだと思います。私がうつすらと覚えているのは、ジャンバルジャンのお話し（ああ無情）、人はどれだけの土地が必要かのお話し（トルストイ）、フランスの大泥棒がギロチンにかけられる前に街中を引き回されて会いに来た母の耳を食いちぎったお話し（怖いお話）ですが、そのころ一緒に育った人は私が覚えていない良いお話を心に刻

んでいました。私がいかに覚えていないのは甘えて、反抗していたのでしょね。このような集団生活の中で私が学んだことは、人を見分ける目だったような気がします。あるいは、人から感じとる力だったようにも思えます。私は、言行不一致の人を最も嫌うようになりました。表面を飾り、取り繕い、それによって自分の立ち位置を良くする人を嫌うようになりました。事実はどうであるか、本質は何なのかをいつも考えるようになりました。言うことは誰でもできます。でも、その人がどんなことをしているか、裏で何をやっているか、本当はどうなのか、このことを常に観察し考えるようになりました。

私自身も裏表で細工するのができなくなつたと思います。皆さんの生い立ちと比べてどうでしょうか。